

# 国語 試験問題

二月一日実施

## 注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十四ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄らんに記入しなさい。

京華中学校

受験番号
氏名

余白

問題はつぎのページから始まります。

余白

一、つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 帰るのが、すっかりおそくなった。

日が長くなった空は、木炭を塗りかさねるように、ゆつくりと暗くなっていく。帰り道、さよりに誘われて、商店街に新しくできた雑貨屋さんによってみた。きらきらしてファンシーで、いいにおいのするシヨップだ。

「いいなあ。こんな部屋に住んでみたい」

さよりが、ゆつくりと店内を見回す。

「さよりの家はお金持ちだから、好きな部屋に住めるじゃない」

少しだけ、ねたみをこめていつてみた。

「ダメダメ。天蓋つきのベッドにしたいっていったら、ダメっていわれたもん」

2 「あたりまえでしょ」

さよりのお父さんは、大手企業の重役だ。毎日ぱりつとしたスーツを着て会社に行くお父さん像は、あたしのあこがれだ。

「琴葉こそ、社長令嬢じゃない。天蓋つきのベッド、ねだってみたら？」

「社長令嬢って、それ、いやみ？」

さよりの肩を、とんとつとついた。

さばさばした性格のさよりととは、小学校のころから仲がいい。

社長令嬢はまちがってないけれど、あたしは社長令嬢のような思いをしたことがない。お父さんとお母さんは毎日のように仕事をしているから、友だちをまねいて、お誕生会をやってもらったことがない。毎年サンタクロースが来ないのは、赤い衣装に油がついてはまずいのだろうと、幼心に思っていた。

「あたし、これ買おうつと。あと、これと、これ……」

さよりが、次々と手にとっていくのを横目に、あたしは財布の中身を計算した。

そういえば、今月のおこづかいもまだもらってない。

さんざん迷ったあげく、サシエをひとつ手にとった。部屋においておくと、いい香りがする。

「ほんとうに芳香剤が好きだねえ」

さよりが、あきれたように笑った。

サシエを鼻に近づけて、深く息をすいこむと、バラのいい香りがした。

「うん、これに決めた」

あたしはそれを手にとって、レジにむかった。

それから、さよりと別れて時計を見たら、七時を過ぎていた。

また、お母さんに小言をいわれる。

重い足取りで家の近くまで来ると、工場の窓から明かりがもれていた。錆びた扉から、そつと中をのぞいてみる。お父さんだったら、すぐににげるつもりだった。

「天馬……、まだいたの？」

3 顔を見て、ほっとする。

天馬が機械をひとつひとつのぞきこみながら、点検しているところだった。中に入りかけたあたしは、もわつとした空気にあわてて身をひいた。機械で熱くなった空気が行き場をなくして、工場の中がサウナのようになっている。

「また、雑用をおしつけられたんだ……」

あたしは、同情するように入った。

朝は始業前に行って機械の電源を入れ、夕方には機械の点検と掃除をする。日中だって、材料を用意したりはこんだり、ときには買ひものなんかの雑用までたのまれて……それなのに、天馬は文句ひとついわない。

「ちがうよ。だれかにいわれたわけじゃない。オレはまだ、追い回しだから」

追い回し……古くさい言い方だ。

その昔、見習いは先輩のいうことをきいて、あっちこっち走りまわっていたらしい。だから、追い回しという。

直接教わったりせず、技術は見て盗めというのも、そのころの慣習だ。今の時代、そんなことをいったらだれもついてこ

ないだろうと思うのに、天馬は進んでそれを受けいれているように見える。

「こうやって点検していると、機械の構造や細部がよくわかるんだ。作業をしているときは、そんな余裕よゆうもないからさ」はじめは、優等生ぶっているだけだと思っていた。でもだんだんと、それが本心であるとわかってきて……。

手先が器用な天馬は、モノ作りそのものがあっているようで、金属を見つめる目は生き生きとしている。

天馬は電源かんでんを確認し、重い扉かぶに鍵かぎをかけると表に出てきた。

そして、おもむろに後ろポケットから丸めたノートをとりだすと、縁石えんせきにすわって何かを書きはじめる。わずかな明かりが照らすノートをのぞきこんだら、何やらびつしりと書いてあった。

図、グラフ、数字、記号……。あたしにはさっぱりわからないけれど、どうやら仕事に関することらしいとだけは、かろうじてわかった。

「仕事が終わっても勉強？ 熱心すぎやしない？」

たまには、息をぬけばいいのに。お父さんの悪口でも、グチでもいってくれば……と思うけど、あたしじゃ相手にならないのかもしれない。

「毎日、新しい発見があるんだ。だから書きとめておかないと、もったいない」

そんなふうにいわれると、返す言葉もなかった。

ふと、天馬の指先に目が行った。機械油で黒くよごれている。

「天馬、手をよく洗ったほうがいいよ。そのうち、お父さんみたいに落ちなくなっちゃうよ」

お父さんの指は、お風呂ふろから上がっても黒いままだ。軍手をしているにもかかわらず、染みしみこんだ機械油が、爪つまのあいだやしわの一本一本に入りこんでいる。お父さんは気にしていないようだけど、あたしはすごく気になる。そのせいで、小学校に上がるくらいから、手をつながなくなっていた。

天馬はノートを閉とじると、はじめて気づいたというように、指先をじっと見つめた。

「そっか。社長の指の油、とれないのか……」

なぜかうれしそうなその顔を、不思議に思う。

「ひとつの技術を身につけるにも、十年以上かかるっていわれてるんだ。オレも、早く社長みたいになりたいよ。そしたら、自分の工場をもつて……」

胸がざわついた。

目標にむかって、つきすすむ天馬。

なんの夢もないあたし。

天馬はどんだん先に行ってしまう。ぜったいに追いつけない。あたしたちの距離は、永遠にちぢまらない……そのことが、なぜかさびしい。

「それより琴葉、オレに用？ どうして家に入らないんだ？」

いわれて、はっと思いました。お母さんに、帰りがおそいとしかられそうだったから、天馬といっしょに入れば安全だろうともくろんだのだ。

思いましたら、余計に情けない気持ちになった。

「腹へった。早く帰ろう」

天馬は察したようにあたしの前に立つと、工場の隣の一軒家にむかった。

(工藤純子『てのひらに未来』による)

1. ———線部1「日が長くなった……暗くなっていく」に用いられている表現技法として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア 直ゆ法                   イ 隠ゆ法                   ウ 倒置法                   エ 擬人法

2. ———線部2に「さよりのお父さんは……あこがれだ」とありますが、さよりの父親と大きく異なる琴葉の父親の様子が具体的に書かれたひと続きの二文を探し、初めの七字を抜き出しなさい。

3. ——— 線部3に「顔を見て、ほっとする」とありますが、その理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 天馬が残っていたら、自分が機械を点検しなくて済むから。

イ 天馬一人が工場に残っていて、父親はいなかったから。

ウ 母親に問いただされても、天馬が味方してくれると思ったから。

エ 遅くなった理由を天馬と機械を点検していたことにできるから。

4. ——— 線部4に「天馬は文句ひとついわない」とありますが、その理由を説明したつぎの文の□にあてはまることばを、指定字数でそれぞれ抜き出しなさい。

自分はまだ I (三字) なので、点検をすることで II (八字) を理解でき、

さらに III (七字) という慣習に従ったりするのは当然だと考えているから。

5. ——— 線部5に「おもむろに後ろポケットから……書きはじめる」とありますが、「ノート」に込めた天馬の気持ちとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 新しい発見を書きとめておくことで少しでもミスが減らし、早く社長や先輩に迷惑をかけないようにしたいという気持ち。

イ 新しく知ったことをすぐに書きとめて着実に自分の身につけることで、少しでも早くあこがれの社長に近づきたいという気持ち。

ウ 社長や先輩よりやるべき業務が多いので、業務時間外に勉強をすることで自分の業務に支障がないようにしたいという気持ち。

エ 図やグラフの書き方は将来自分の工場を持つときに必要な能力なので、今のうちからしっかり練習をして身につけたいという気持ち。



6. ———線部6に「うれしそうなその顔」とありますが、天馬はなぜうれしそうな顔をしたのですか。その理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 指に染み付いた油の量は身につけた技術の証あかしなので、自分はまだまだ色々な技術を学ぶことができるのだと楽しみに思えてきたから。

イ 機械油のついた自分の指を見て少しずつ社長の手に近づいてきたことを実感し、もう少しで社長と対等に話ができるようになると思ったから。

ウ 落ちない指の油は家族を犠牲ぎせいにして仕事をしてきた社長の人生の象徴しょうちゆうなのだと感じ、自分もそんな人生を歩めるに違ちがいないと確信したから。

エ 指の油がとれなくなるのはひたむきに仕事に打ち込んできた証であり、自分と尊敬している社長との間に共通点を見出したから。

7. ———線部7に「余計に情けない気持ちになった」とありますが、琴葉はもともとどのようなことに対して「情けない」気持ちをいっていましたか。三十五字以内で説明しなさい。

二、つぎの文章は令和二年六月十七日に朝日新聞に掲載された文章です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

気になりませんか？ 日本語に「等」（など／とう）という言葉が頻繁に出てくることを。政治家の言葉、法律、ビジネス文書、新聞にもよく顔を出す「等」。その正体とは――。

【文章Ⅰ】

あいまいさ、世界で通じぬ 石川和男さん（元経済産業省官僚）

官僚や政治家にとって、「等」は非常に便利な言葉です。法律で定めた範囲を柔軟に広げたり、にしたりする働きがあるからです。

経済産業省の資源エネルギー庁にいた時、こんなことがありました。当時の私は、発電所を建設する際、その立地を受け入れた自治体に国が補助金を出し、発電所周辺の公共施設建設などに係る予算を付ける仕事をしていました。

A、国の補助金の使い道を定める「交付要綱」を書く仕事がありますが、補助金の対象には道路や橋だけでなく、「その他・アメニティー施設等」というような文言も加えたことがありました。この「等」一文字で、ほぼどんなものにも補助金を付けることが可能となります。

実際、水力発電所を建設することになったある自治体には、カラオケルームをつくることも許容しました。地元の方々には感謝されましたが、こんな手法は霞が関では珍しくありません。

B、国民のニーズは今きわめて多様化しており、政治家も官僚も応えようとしません。そうした時、「等」が威力を発揮するのでほしい国民もいる。そんな多様なニーズに、政治家も官僚も応えようとしません。そうした時、「等」が威力を発揮するので

す。  
ただ、私はいま、<sup>1</sup>こうしたやり方が全面的に良いとは考えていません。このグローバル化時代、海外ではまず通用しないからです。

それは、外国との交渉を経験すると分かります。私は外国政府との交渉も担当した経験がありますが、法律や文書で、日本ほど「等」を多用している国はありません。海外の交渉担当者が困惑することもしばしばです。

米国やヨーロッパ、中国の政治・行政の法令では、「認める」「認めない」の一線をきつちり引くものです。これらの中には、きわめて多種多様な民族がいます。言葉で明確にルールを定めなければ、行き違いやトラブルの元になるでしょう。一方、日本では、「認める」「認めない」の境界線が、まるで絵の具がじんわりにじんんでいるかのよう、あいまいなことが多いのです。これは、異質なカルチャーが外から入ってきにくい島国であることも関係しているのかもしれませんが。

法律やルールの境界線をあいまいにできるといふことは、ときの政治家や官僚による解釈で、法律を恣意的に読み変えられることにもつながります。実際、この国は、憲法や重要な法律の読み方を解釈で変えてしまう国です。

「等」のおかげで、より多くの国民を助けることもあります。しかし私は、日本もそろそろ、法やルールの線引きを明確に定めるべき時に来ていると思います。

(聞き手・稲垣直人)

## 【文章Ⅱ】

### 恣意的解釈、ルールが防ぐ 吉田利宏さん（元衆議院法制局参事）

私は衆議院法制局に15年勤め、主に議員立法をつくる際の補佐をしてきました。最初に自分が書いた法案を見せた時の上司の言葉を今でもよく覚えています。「ここにある『等』は何を指しますか？」

それまで日常的に使ってきた「等」は、「それ以外のさまざま」をひっくり返る言葉でしたから、具体的に何を指すかと聞かれてびっくりしました。法令用語としての「等」は厳密に使わないといけない、と知りました。

具体的に言えば、「等」の前にはもつとも代表的なものを置くこと、「等」で省略されるものを必ず全て列挙できること、これが法文で「等」を使うための条件なのです。

これと正反対の、あいまいで便利な「等」が今、あふれています。会社のコンプライアンスの必要性が叫ばれた頃から、ビジネス文書が増えてきました。まだ立場や方針が完全に一致していない同士でも、要所に「等」をつけておくと、全体として「同じ方向を向いている」という雰囲気が出るのかもしれませんが。

行政の世界もそうです。コロナ危機は誰にも想定外の事態だったはずですが、まずは選択幅を広く取っておこうと、自粛要請の予定対象として「遊興施設等」「劇場施設等」という表現が使われました。政治家の場合は、互いに主義や立場が違う者同士が歩み寄るため、「社会情勢等の変化に対応する等」などと玉虫色の言葉を使えば何となく調整できた気になる。

でも法律の文章では「等」は厳密な用語です。私は「等」と書いた掛け軸を床の間にかけてもいい、と思うほど大切だと考えています。法律は国民の権利義務にかかわりますから、小さい言葉ほど軽く扱ってはいけないのです。

法文は抽象的なので、時代の現実<sup>じこ</sup>に即した解釈<sup>せき</sup>がその都度必要になります。例えば、民法90条の「公の秩序又は善良の風俗」が何を指すのか。ただ、その解釈は条文の目的に照らしていないといけません。そのためには、「等」のような小さな用語を足がかりに解釈を広げられてしまう可能性を、あらかじめ消しておく必要があるのです。

だから、法令用語は意味が変わらないよう、一定のルールの下で使われます。

例えば、「又は」も「若しくは」も英語では同じ「or」ですが、法令用語では最初に大きく分けるのが「又は」で次が「若しくは」と順番が決まっています。「死刑又は無期若しくは5年以上の懲役」となるのです。

「あなたの行為は、法律のこの『等』に含まれますので違反です」と罰則を科されたらたまりません。恣意的な解釈を防ぐため、厳密なルールで使われるべきなのが法文の「等」。覚えておいて損はないと思います。（聞き手・中島鉄郎）

### 【文章Ⅲ】

#### 安全期する「ぼかし用法」 石黒圭さん（国立国語研究所、日本語教育研究領域代表・教授）

「等」は、特に書き言葉では、正確性や厳密性を期すために使われます。しかし最近<sup>みかくにん</sup>は事実未確認であることをぼかしたり、<sup>\*</sup>言質<sup>げんち</sup>を与えなかったりするために使う用例が増えています。

たとえば「電車、バス等の公共交通機関を利用して下さい」という文。ここに「等」がないと、地下鉄やタクシーは除外されてしまうでしょう。この「等」は、厳密さを担保するためにあります。すべての公共交通機関を列挙するのも煩雑<sup>はんざつ</sup>ですから、「代表的な具体例十など」で簡潔に表現できる意味もあります。

**C**、<sup>3</sup>話し言葉では、その中心的な用法は「ぼかし」に変わります。

たとえば私が「A大学の文学部には、X教授やY教授などがある」と言ったとしましょう。他にも教授はいるが、名前は知らない。それがバレるのも決まりが悪い。そこでとっさの時間稼ぎ、または他人からの突っ込みを回避<sup>かいひ</sup>するため、こう言うのです。

このぼかし用法は、表現を柔らかくする効果もあります。「カラオケはいかがですか？」と言うより、「カラオケなどいかがですか？」と誘<sup>さそ</sup>うほうが角が立たない。これも話し言葉ならではの。

こうした用法は最近、ネットの影響で書き言葉にも広がり、増えていると思います。

ネット上の文章は、多くの人の目に触れ、記録として残ります。間違いを書けば、批判されるかもしれない。ネットならではの速報性も求められ、事実確認するヒマもない。こんな時、言い方をぼかしておこう、という心理はたらく。新聞記事にも「など」は多いのですが、こうした「情報の安全性」という理由も大きいでしょう。

これは近年、助詞の「と」よりも「や」が好まれる現象と似ています。指示対象が二つだけなら「AとB」、三つ以上なら「AやB」ですが、AとBの二つしかないのに、「AやB」を選ぶ人が増えています。情報過多の今、「本当にAとBの二つだけ？」と問われると自信がない。そんな時、「AやB」「AやBなど」と言いがちです。

コロナ対策で東京都が当初作った休業の要請・協力一覧にも「遊興施設等」「大学、学習塾等」との表記が数多くあります。これも全業種を漏れなく含めたい正確性と、行政の裁量の余地を残し、起こりうる批判はかわしたいとの考えがあるように思えます。

注意すべきは「等」の前の名詞です。公共交通機関を表す場合、「電車、バス等」はOKですが、「地下鉄、タクシー等」は問題です。「等」の前が代表的・典型的なものでないと、イメージが湧きません。あいまいさ回避のコツは、「等」を付けないことではなく、「等」の前の名詞を慎重に選ぶことにあるのです。（聞き手・稲垣直人）

\* コンプライアンス … ルールに従って公正に業務を行うこと。

玉虫色 … 見方や立場が変わると解釈が変わる表現。

言質 … あとで証拠となることば。

1.  A  C にあてはまることばをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア しかし            イ あるいは            ウ なぜなら            エ たとえば

2.  にあてはまることばを【文章I】から四字で抜き出さない。

3. ——— 線部 1 「こうしたやり方」を説明したものとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 国民の支持を得るために必要以上に補助金を取り付ける手法。

イ 補助金の対象を広げるためにことばを都合良く利用する手法。

ウ 補助金をより弱い立場の国民のために多く使おうとする手法。

エ 法律用語でごまかして補助金を多く手に入れようとする手法。

4. ——— 線部 2 「日本もそろそろ、……来ている」と石川和男さんが考えるのはなぜですか。「国際化」「異文化」ということばを必ず用いて六十字以内で答えなさい。

5. ——— 線部 3 に「話し言葉では、その中心的な用法は『ぼかし』に変わります」とありますが、話し言葉で「ぼかし」の表現を使う理由を説明したつぎの文の  にあてはまることばを、指定字数でそれぞれ抜き出しなさい。

よく知らないということをごまかすために時間稼ぎをしたり、  I (十三字) と考えたり、

II (九字) ことで相手との関係を悪くしないようにしたりするから。

6. 【文章Ⅲ】の内容をふまえて、「等」の正しい使い方の例として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 推理小説、恋愛漫画等の本を読む。

イ 受験にむけて図形問題、四字熟語等の勉強にはげむ。

ウ カエル、犬等の動物を飼う。

エ 中華料理店、フランス料理店等のレストランを使う。

